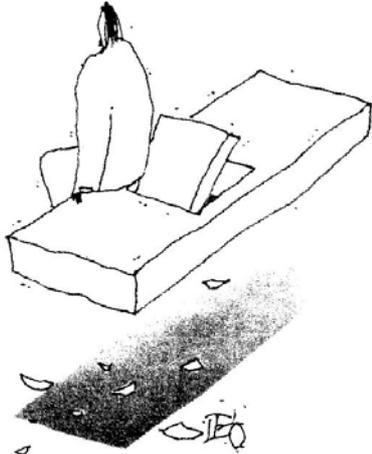


大工と大工道具

第2編 17章

キリストは御自身の功績によって私たちに神の恵みと救いを得るようにしてください。



私たちが守ることができない律法をキリストがみな守ってくださって、私たちが支払うことのできないすべての要求をキリストが代わって完全に支払ってくださったためだからです(ガラテヤ 4:4、5)。ですから、誰でもキリストにあるならば神に義とされるのです。なぜ、そうなのでしょう。神はキリストの義を私たちの義と見なしてくださるためです。

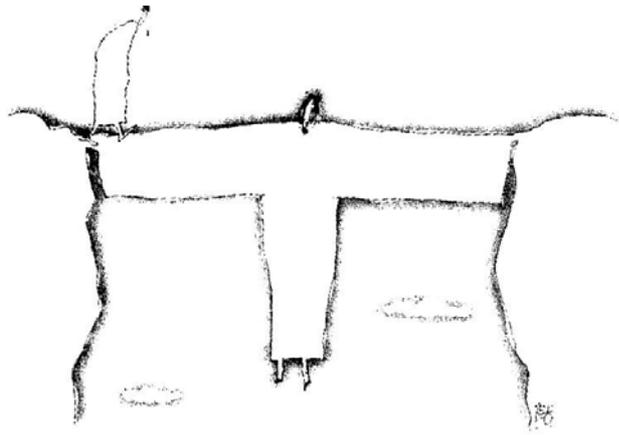
昔は家を造るときに大工がただ一人ですべてを行っていました。建築主の求め従って一人で設計し、材木を削り、釘を打ちながら家を造って行ったのです。そのため大工になる道はそんなに簡単なものではありませんでした。大工の師匠に弟子入りして、その業を熱心に学ばなければなりませんでしたが、技術を学んでいる間は満足な報酬を受け取ることはできませんでした。すべての技術を習得して師匠が大工道具一揃いを与えることが一人前の大工になった証明となりました。

大工道具は大工の命のようなものであったため、たぶんそれは象徴的にも実際的にも高価な報酬となったのでしょうか。イエスは救いの家を建てる時の大工なのでしょうか、それとも大工の使う単なる道具にすぎないのでしょうか。私たちが救われるときキリストの功績はどのような役目を果たすのでしょうか？それは神の恵みに少しだけつけ加えられるものにすぎないのでしょうか、それとも人の功績と共に働くものなのでしょうか。そうでなければ最初から最後までただキリストの功績によるものなのでしょうか。あなたはこのことについてどのように考えますか。

第1節 キリストの功績は神の恵みと対立しない

ある悪知恵にたけた人々は私たちがキリストを通して救われることは認めながらも、キリストの功績を聞くに堪えないものだと考えます。この功績という言葉が神の恵みをおぼろげにするからだと言う理由のためです。そして彼らはキリストが救いの家を建てる時の大工ではなく、単なる神の恵みの手によって用いられる道具にすぎないと言い張るのです。ペトロのようにキリストを命の主、その導き手、支配者(使徒 3:15)とは認めようとはしないのです。

しかし、キリストは救いの家を造る
ときの単なる道具ではなく、その大工
として卓越した功績を挙げられまし
た。そして私たちはただ彼の功績によ
って神の恵みを受けることができる
ようにされたのです。もちろん、その
大工は神が任命されたものです。アウ
グスチヌスが語っているように救い
主イエス・キリストは神の選びと恵み
との最も明らかな光となられ、私たち
の頭としなされることで恵みのただ



一つの通り道になりました。ですから、この恵みはその頭であるキリストからすべて肢体にそれぞれ注がれ、広がっていくのです。彼が神の恵みを受けて最初からキリストとなられたとように、私たちも同じように恵みによって信仰のはじめからキリスト者となったのです。

このように私たちはキリストの功績について語るとき、その起源が彼にあると語ることはできません。いつも第一原因は神の決定にさかのぼるのです。神がただ御自身の御心にかなうところに従ってキリストを私たちに救いを与えるための仲保者として任命されたのです。ですから私たちのための救いの家は神が設計されたものであり、その大工を任命されたのも神だと言えるのです。そのためキリストは単なる救いの道具ではなく、自ら大工として特別な業を果たされたのです。私たちは彼の功績によって神の恵みを受けることができるようにされたのです。

第2節 キリストの功績は神の恵みと一つに結びついている

ですから、キリストの功績と神の愛を対立させることはおろかなことです。常識から言ってあることの下位にあるものはその上位にあるものと衝突することはありません。こう 言えばよいでしょう。私たちはただ神の愛によって義とされたと言えると同時に、神の愛のより下位にあるキリストの功績によって救いの恵みを受けたと語ることもできるのです。

むしろ私たちは神の愛とキリストの功績を互いに対立させることなく、その二つを同時に私たちの人間的なすべての義に対立させなければなりません。聖書も神の恵みとキリストの義を互いに密接に結びつけています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。ここで神の愛は最高の原因であり、キリストに対する信仰は第二、つまり最も私たちに最も近い原因として示されています。

つまりキリストは私たちに救いの形相であるだけでなく、同時に救いの質料となると語っているのです。形相(形、構造)と質料(内容)の関係は家と煉瓦の関係のようなもので、キリストは単なる救いの形や形式ではなく、実際に私たちにとっての救いの内容と効果となってくださったという意味です。私たちはただ彼を信じることによって義とされるのであれば、当然私たちの救いの質料も彼に求めなければならないのです。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(第一ヨハネ 4:10)。ここで

も神の愛とキリストの功績は私たちを救うおうとすることで一つとなっています。そしてキリストは私たちに対して神の怒りを静めてくださる救いの内容(質料)となってくださったのです(第一ヨハネ 2:2; コロサイ 1:19、20; 第二コリント 5:19、21; エフェソ 1:4~6、2:15、16)。

第3節 キリストの功績は聖書が明らかに証言している

キリストはその従順によって父の恵みを受け、私たちにそれを分け与えてくださいます。義人として不義なる私たちのために代わって苦難を受けられたのです。つまり、彼はご自分の義によって救いを受け、私たちにそれを与えられたのです。そうであるならばそれは彼の功績によって私たちは救いにあずかることができたと言ってどこが間違いとなるのでしょうか。この点を確実に証言している聖書箇所はたいへんに多いのです(ローマ 5:10、11)。

ローマ5章19節の対照法はキリストの功績がどのようなものであるかを明らかに示しています。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」。動詞は未来形で記されていますが、文脈から見てここに現在の義が含まれていることは明らかです。パウロはすでにこの前の節で「(現在の)この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません」(ローマ 5:16)と語っているからです。

またキリストが彼の功績によって私たちにもたらされた恵みとは彼の血によって私たちの罪を贖ってくださったことです。「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」(第一ヨハネ 1:7)。「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(マタイ 26:28; 参照 ルカ 22:20)。彼の流された血の結果、私たちの罪が私たちから取り去られたとするならば、彼の血の値によって神の裁きがすでに十分に実行されたという結論になります。それは私たちの受ける審判はもはやないという意味なのです。

洗礼者ヨハネの証言もやはり同じ意味を語っています。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ 1:29)。モーセも何度も語っていますが(出エジプト 34:7; レビ 16:34)、旧約の象徴はキリストの死がどのような権能を持っているかをよく示してくれるのです。ヘブライ人への手紙にも同じ内容のみ言葉が繰り返し語られています(ヘブライ 9:12~15、22、28)。パウロも「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです」(ガラテヤ 3:13)と語っています。

イザヤの有名な証言もあります。「彼の受けた懲らしめによって / わたしたちに平和が与えられ / 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(イザヤ 53:5、8)。これに「そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」(第一ペトロ 2:24)というペトロの解説が加えられれば、この点に関するすべての疑惑が取り除かれます。ペトロの言葉を整理するならば、キリストが私たちに代わって罪を担ってくださったので、私たちのその罪が赦されたと言っているからです。

このようにキリストの死は私たちを死の裁きから救い出すために支払われた代価なのです。使徒パウロはこのように証言しています。「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」(ローマ 3:24、25)。ペトロの発言も同じ意味のもので、「あなたがたが先祖伝来

のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」(第一ペトロ 1:18、19)。

つまりキリストの死は私たちの罪のための代価を支払うことで(第一コリント 6:20)、私たちが受ける罰を代わって受けられたものなのです(第一テモテ 2:5、6)。このことのために使徒は私たちがキリストの血によって受けた救いを「(キリストが)十字架に釘つけられることで罪を取り除かれた」と表現しています(コロサイ 1:14、2:14)。そして使徒は他のところでこのようにも表現しています。「わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます」(ガラテヤ 2:21)。

この言葉をもう一度説明するならば、人が律法を守ることで受けることができるものを私たちはすべてキリストに求めなければならないと言っているのです(比較、レビ 18:5、使徒 13:39)。私たちが守ることができない律法をキリストがみな守ってくださって、私たちが支払うことのできないすべての要求をキリストが代わって完全に支払ってくださったためだからです(ガラテヤ 4:4、5)。ですから、誰でもキリストにあるならば神に義とされるのです。なぜ、そうなのでしょう。神はキリストの義を私たちの義と見なして下さるためです。

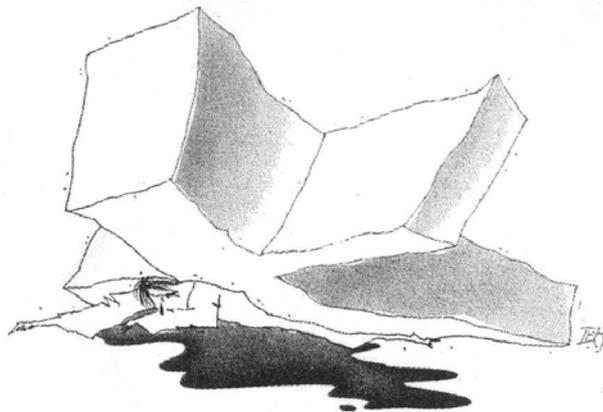
聖書がキリストの肉を私たちの食物(ヨハネ 6:55)と語っている唯一の理由は何でしょうか。それは私たちが彼にあって命の本質を発見することができるからです。その命の力はただ神の御子が私たちが義とされたために代価として十字架にかけられたという事実から生じるのです(エフェソ 5:2)。整理して見るならば、私たちはキリストの死を通して救いを受けただけでなく、彼の恵みによって日ごとに神の好意を受けるのです。

第4節 キリストの功績は少しも自分のためのものではない。

ある人々は(ロンバルドス、スコラ派の神学者)はキリストの功績がご自分のためであったかどうかを問題にして語っています。それはたいへん愚かな好奇心と言えます。神の独り子は自分のために何か新しいものを得るために、この地上に来られる必要は全くありませんでした。父が子を死に渡されることで子を惜しむことがなかった(ローマ 8:32)のはただ世を愛されたためでした(ヨハネ 3:16; 参照 ローマ 8:35、37)。

そしてキリストは私たちが贖われるために完全に献身され、徹底して自分を低くされたのでした(フィリピ 2:6~8)。しかしある者たちは「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」

という使徒の証言(フィリピ 2:9)を取り上げてキリストが自分の苦勞と功績によってついには高く上げられたのではないかと語るのです。愚かな言葉です。フィリピの手紙のそのみ言葉はキリストが高くされた理由を語っているのではなく、私たちの模範とするようにと、キリストが高くされたのは、低くなられたことを通



してであったという事実を明らかにしようとするためのものでした（ルカ 24:26）

結びの言葉

キリストは救いの家を建てようとする神の決心に従って大工として任命されました。そして救いのために苦しみ代価を払われることで功績を得られたのです。私たちはただ彼の功績によって神の恵みを受けるようにされています。つまり、神の愛によってキリストの功績が存在するようにされ、キリストの功績によって神の救いの恵みが私たちに及ぶようにされたのです。ですから私たちは何の心配もなく日ごとに、永遠に変わらない神の愛と恵みを受けることができているのです。